

連載 (供覧) いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第二十四回 祭祀と仏教

南出喜久治 (令和7年8月15日記す)

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

その当時伝來した大乗仏教といふのは、実は宗教を言ふよりは、当時の支那における建築、工芸、彫刻、美術などの造形技術などと思想体系とが一体となつた総合学問であり、仏教伝來といふのは、金ピカの金メッキが施された仏像が伝來して、これを見せられ、これを作るだけの優れた芸術はこれとともに伝來した思想に支へられたものであり、その思想も優れたものであるとの自己暗示によって受け入れられたものです。

いきなり仏教の教へを人々が素晴らしいものと納得して仏教を受け入れたといふ意味での仏教伝來ではなく、その実相は、「仏像伝來」を契機としたものであつたことは歴史的事実なのです。

ともあれ、我が国では、神仏習合の歴史があります。これは、厳密には宗教と祭祀の習合とは異なりますが、祭祀を伝承する古神道の持つ八百万の神々の寛容性と、発祥地のインドから支那を経由して各地の伝来信仰を吸収して取り入れてきた我が国の伝来仏教の性質としての歴史的な実績としての例外的で限定的な寛容性によるものです。

稻作発祥の地とされる支那の雲南省や貴州省などの山岳地帯に暮らすハニ族、タイ族、ミャオ族などには、初穂に稻魂が宿り、それを祖靈と共に崇拝する「稻魂信仰」があり、仏教が伝來した後も、稻魂は釈迦よりも上座に位置するのです。まさに、反本地垂迹説なのです。このやうに、祭祀が主であり、宗教が従であるとすることに覺醒した世界の人々からすれば、人は、死して後、成仏して絶対神の御許に至つて後裔と無縁の存在となることを願ふ「自利」を求めるのではなく、後裔の繁栄を守護する祖靈となることを願ふ「利他」にこそに祭祀の真骨頂があります。

我が国において、神仏習合の歴史があるのは、天照大神の三大御神勅（天壤無窮、宝鏡奉斎、斎庭稻穂）のうちの、斎庭稻穂の御神勅と関係がある「稻魂信仰」が影響してゐる

ものと思はれます。

ところで、この神仏習合を進めたのは、本地垂迹説といふ考へでした。本地垂迹といふのは、仏と菩薩が衆生を救ふために、その本地（真実の身）を仮の種々の垂迹（仮の身）の姿に変へて現れるといふ神仏同体の考へで、本地が仏であり、垂迹が神々といふことです。

そのために、神社の境内に付属した神宮寺を設置するといふことが全国に広がつたのです。

しかし、そもそも、古神道による祭祀の始まりは、宗教成立以前のことですので、垂迹が先に生まれ、本地が後になることの説明がつきません。また、外来の仏が本地で、従来からある神々が垂迹といふのも理解に苦します。

いづれにしても、本地垂迹説は、虚構の仏教を浸透させるための偽装に過ぎず、強いて言へば、神（上）が本地で仏が垂迹とする反本地垂迹が正しいといふことになります。